

## 道を辿る——京都から長谷寺を詣でる旅——

一文字 昭子

かくて、としごろ願あるを、いかで初瀬に思ひたつを、たたむ月にと思ふを、さすがに心にしまかせねば、からうじて九月に思ひたつ。(1)

折しも九月、京都から長谷寺参りの道を辿ることとなった。前回の斎宮群行の道を辿る旅同様、案内および解説は福嶋昭治先生である。今回はまた隴谷寿先生もオプザーバーとしてご参加下さった。参加者は総勢三十名。一日で辿るという時間の制約もあり、

門出ばかり、法性寺のへにして、(2)

とある法性寺・同聚院および許波多神社は前日に廻ることになった。

法性寺・同聚院・許波多神社

法性寺は藤原忠平の建立した寺である。創始は延長二年(九二四)二月十日以前(3)とされる。朱雀天皇が在位中に御願堂二棟と建て、御願寺とし、皇太后藤原穩子が多宝塔と一切経を供養、村上天皇は普賢・観音両像安置の塔と一切経、藤原道長は丈六五大尊と五大堂をつくるなどして、寺領は現在の東福寺・泉涌寺から東山の域に及んでいたという。

しかし九条兼実の孫道家が東福寺を創建した後、次第に衰退し、一条経通の代にすべて東福寺に移管され、江戸時代には東福寺門前に旧跡を残すのみとなった。現在の寺は明治三十四年に栗本教光尼が入寺して、再建したものである(4)。したがって今日では尼寺ということになる。ここには十世紀頃のものと考えられる千手観音像(国宝)が安置されている。時代からいって藤原忠平や、道長などが実際に拝んだものとも考えられ、その同じ像を

見にゆくということに意義（ロマン）を見いだしたわけである。

拝観は予約する必要があるのでもって、お願いしておいた。門前に説明の板がある。案内してくださった方は手慣れた様子で蠟燭に灯をともし、お線香の用意をしてくださる。その間座って待つ。祭壇の奥に思っていたよりも小ぶりの像が安置されている。庵住様がおいでになり、挨拶をされた。庵住様は今年九十三歳だそうである。一人づつお参りをさせて頂いた後、「仏様のすぐ前までいって御覧ください」と言われ、待ってましたとばかり、ぞろぞろと列を作る。木の肌が感じられるふくよかなお顔・体つきである。一回り見終わると福嶋先生が待ちかねたように蠟燭の火を消された。火災を慮つてのことである。それからゆっくりお話をうかがう。二十五名も押し掛けたのに、お茶までごちそうになつてしまった。帰りには御丁寧にも門の外まで見送つてくださり、恐縮の至りである。

次に、今は東福寺の塔頭の一つである同聚院へ向かう。寛弘三年（一〇〇六）藤原道長が四十賀にあたつて、法性寺内に丈六の五大明王を安置する五大堂を建立した。同聚院の辺りであつたと言われている。そしてここに法性寺のものと伝えられる不動明王像が安置されているのである。制作年代は平安時代、おそらく藤原道長もお参りしたであろう像である。後背の火焰が風に靡いて右に

八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く、いみじうあはれなり。

のくだりの虫の音なのだそうである。昔の人はこれを蓑虫が鳴いていると思っていたが、実際は別の虫である。

京都から宇治へ（九：〇〇発）

九月十四日（月）。快晴。朝八時四十五分集合。京都駅八条口待つヤサカ観光のバスに乗り込む。総勢三十名。鴨川に架かる勧進橋を渡り、宇治川に架かる観月橋まで南下する。橋の手前から六地藏へ向かう。六地藏は古来からの交通の要所である。長谷へ向かう旅人はこのように鴨川沿いの道を宇治川まで南下するが、鴨川沿いの道を途中藤森付近で東へそれ、山を越えるか、またもつと北から一度山科方面へ出て、醍醐からの道を辿るか三通りの道があるが、何れもこの六地藏へ出ることになる。

さて、私たちが最初に向かうのは浄妙寺跡である。浄妙寺は藤原道長が祖先の供養の為に建立した寺で、一名木幡寺とも言われる。道長が若年のとき、父兼家に従つて木幡にある先祖代々の墳墓の地に赴き、その荒れ果てた様子をみて、もし、将来自分が出世したら寺を創り、弔おうと誓つたと言われている（<sup>6</sup>）。後年、誓い通り壮

寄っている様が珍しい。巨大な像の後ろまでじっくりと拝見し、次の許波神社へと向かった。

JR奈良線木幡駅下車。途中、お寺があり、表札に「願行寺」と書かれている。付近の廃寺の仏様が安置されており、拝観候補には入っていたが諸事情により削られたお寺である。門だけ記念撮影し、皆の後を追う。許波多神社は延喜式内社で三社ある。その内の一つで、境内には宇治三十六号墳、藤原基経の墓と伝えられる墳墓がある。林屋辰三郎氏は「藤原道長の浄妙寺について」と題する研究論文において、この許波多神社の鳥居から浄妙寺の位置を推定され、後に出土した発掘品からその推測が裏付けられたという。浄妙寺跡は明日見学することになっている。「御堂関白記」寛弘元年二月二十九日条に「鳥居の北方より河に出づ。その北方に平所あり。道の東なり。」と書かれた堂ノ川を見に行く。ほそい溝川であるが、平安時代から脈々と流れていると聴くと感慨を新たにす。道行く人はなぜこの溝川に大勢群がっているのかさぞ不思議であろう。怪しげな宗教団体と思われたかもしれない。夕闇が迫り、今日の予定はこれで一応終了である。木幡駅に向かう途中、民家の塀から下がっている庭木の枝から虫の音が聞こえてきた。福嶋先生の説明によるとこの虫の音が例の「枕草子」三十九段「虫は」（<sup>5</sup>）に出てくる

大な伽藍を建立した。道長・頼通をはじめ藤原氏一門が埋葬されうことになり、摂関家の墓所を守る寺として繁栄したが、武士の台頭という時代の波には抗しきれずに衰退し、寛正三年（一四六二）の一揆の放火により焼亡した（<sup>7</sup>）。木幡山は左に青龍、右に白虎、前に朱雀、後ろに玄武の勝地なりと言われたが（<sup>8</sup>）、何れも当てにはならなかったらしい。現在は木幡小学校となり、多宝塔の跡と考えられる所にはジャングルジムが建っている。福嶋先生が許可を頂いて、我々は小学校の敷地に入る。

平日なので授業を行っている。校舎の裏を廻ると、説明版が設置してあった。ここは小学校を立て直す時に発掘を行い浄妙寺跡であることが確認されている。プールのある場所からは現在国の重要文化財に指定されている越州窯の青磁水注が出土している。遺跡公園にしたいという意見もあったそうだが、郊外への人口の移動が著しくそれどころではないそうである。平成四年三月に宇治市教育委員会から「木幡浄妙寺跡発掘調査報告」（宇治市文化財調査報告第4冊）が出されている。帰り際に職員室にお礼を述べにゆくと、先生が入り口までできて見送つてくださる。昨日の法性寺といい、こちらの方々はとても丁寧なので恐縮してしまう。残暑で蒸し暑い日であるが気持ちは何となく爽快である。

再びバスに乗り込み、南下。昨日訪れた許波多神社の前を通り、黄檗（おうぼく）を通して。菟道にさしかかる。菟道稚郎子

の墓が右前方に見える。仁徳天皇の兄で位を譲り合つて自殺したとされる皇子である。世界最大の陵域を誇る仁徳天皇陵と比べるべくもない小さな墓、但し、今の個人の墓とは反対の意味で比べものにならない。通り道の脇には今もお茶畑が少し残っている。道路脇の宇治の茶畑は静岡の茶畑のように丸く刈り込んであるのと違い、ずっと伸びているのが目新しい。すぐに宇治である。川の手前は『山城州大絵図』（安永七年（一七七八））では「大路方」と記される。新しくかけ直された宇治橋の手前、道路の真ん中といってよい所に小さなお社がある。彼方神社とのこと。バスの中から参拝し、橋を渡る。宇治平等院は素通りである。バスの中で、瀧谷先生が平等院の発掘の話をしてくださる。いまの鳳凰堂の池より、平安時代はずっと広く、堂が「浮かんでいる」という様で、宇治川もずっと平等院寄りに流れていたとのこと。近々とは言わないが、そのように復元する計画がすでにあるそうである。

宇治から木津川へ（一〇：四五）

大通りに沿って福祉会館・生涯学習センターを右手にみながらすすむうちに上り坂になる。ここが『更級日記』などに登場する栗駒山ではないかといわれている山だそ

うである。辞典には、

栗駒山は北は宇治から南は大久保・久津川・富野荘におよぶ南北五キロにわたって起伏する一連の低い山々の総称。（文学遺跡辞典・昭和五十二年・東京堂出版）

と出ていた。『更級日記』の「その山、越えはてて」という文から想像される一つの山というイメージとは齟齬があるように感じたのであるが、今こうしてバスで越えていく山はいかにも往事、人々が徒歩や輿、或いは馬などで越えていく様子を想像できる山である。但しこの山が『更級日記』等に記述される「栗駒山」であるという決定的な決め手はない。『山城州大絵図』のこの場所辺りには「栗籠山」が描かれている。植物公園を過ぎたあたりから久世、城陽市である。バスはできるだけ古い道を通るようにお願いしてあるので山の際を上がったり、下がったりしながら進んでいく。現在の宇治から奈良に向かう道はもつと西に京奈和自動車道があり、まっすぐな道となっている。鴻の巣山を降りたあたり、奈良方面へむかう道に乗るために四角形の四辺をぐるっとまわって方向を変える。ここは熟知していないとんでもない方向にいく羽目になってしまふところだそうである。無花果畑がある。この辺り道の右手が富野。『更級日記』に「やひろうち」と書かれる場所の候補地其の一である。其の二は道

の左手で観音堂という場所である。富野には字野路地（やいろじ）という場所があり「やひろうち」の根拠とされる。一方観音堂はもとの村名を八呂路（やいろじ）村といいそれが「やひろうち」の根拠となっている。『山城州大絵図』では両方とも道の右になっているので我々が現在通過しているよりもっと山寄りに道があったと思われる。長谷川という天井川をくぐり木津川に沿って南下を続ける。川がやや東に蛇行しているその向こうにこんもりとした森が見える。特にどうということのない森であるが万葉集に名高い飯岡（いひおか）とのこと。解説して頂くとただの森が一瞬にして何か特別な森になるのがおかしい。飯岡は『万葉集』では「馬咋山」と言うそうである。巻九一七〇八番歌

泉河辺作歌一首

春草 馬咋山自 越来奈流 鴈使者 宿過奈利  
はるくさを うまくひやまゆ こえくなる かりのつかひは やどりすぐなり

伝説ではまた「湯岡」あるいは「湯岳」ともいい、その由来はこの丘で清水が湧出したことから言われている。玉水橋を右手に見ながら快調にバスは進む。やがて開橋がみえてくる。本当はここを渡って、対岸の精華町へ

も行ってみたのであるが、何分時間がない。精華町には柞の森・瓜生田の碑がある。しかし福嶋先生のご説明によると柞の森はこの対岸からみるのがもつともいいとのこと。車中から写真を撮る。撮っているうちに上粕に入る。ここで木津川は東に大きく曲がっている。今回の旅の目的地の一つである泉橋寺が川岸にあるが、取りあえずバスは東に折れ、木津川上流へと向かう。長谷寺参りの道からは大きくそれるが、この上流に恭仁京跡がある。ここは個人ではなかなか行く機会がないので今回の旅で寄ってみることにしたのである。「みかのはらわきてながるいづみがわ」の歌が道路脇の看板に書かれている。バスを大通りに停め、徒歩で山城国分寺跡へ向かう。恭仁京はわずか四年あまりで廃都となり、宮域はそのあと国分寺として再利用されたのである。小さな原っぱに塔の丸い礎石が残っている。模造品ではなく本物の礎石ということで触ってみる。「石の記憶」というものがあるのなら聴いてみたいものである。横の小学校の裏の空き地に「恭仁京大極殿址」と書かれた碑が建っている。全員の集合記念写真を撮る。後ろの山の上には海住山寺がある。境内からは瓶原（びんのはら）が一望に見渡せる絶好の場所だそうである。しかしとても山上まで登っている時間はない。帰りがけに先ほどの恭仁京の碑が内藤湖南の揮毫になることを瀧谷先生が教えてくださる。なるほど碑の側面に「大正十二年十一月十一日内藤虎次郎敬書」と

彫られた文字が読める。内藤虎次郎こと内藤湖南は京大を退いた後ここ瓶原に隠棲して遺跡の保存にも一役果たしたのであった。

#### 泉橋寺から奈良市街へ

再び国道一六三号線を泉橋寺まで戻る。福岡先生が前もって我々三十名の拝観を連絡しておいてくださった。門前に大きな石のお地藏様がある。山城町指定文化財となっている。「泉橋寺縁起」によると天平十三年、行基が勅を奉じて造立したと伝えられている。現在の石仏は頭と両腕が元禄三年（一六九〇）に補われたもので、時代時代に修復をしながら伝えられたものであることが窺われる。当たり前といったら当たり前なのだが用意していた『五畿内名所図会』の泉橋寺の図と配置が全く同じで変わっていない。しかし境内にあるという平重衡の南都焼き討ちの際に殺された人々の供養塔（五輪塔）は名所図会では神功皇后の塔になっており、泉橋寺でいたのだいた案内では光明皇后の遺髪をお祀りする為に建立された塔になっていた。福岡・瀧谷両先生の説明によるとこの五輪塔は実際に発掘調査により骨が出ており、供養塔であることが確認されているそうである。重要文化財に指定されている。塔の傘の四隅の部分が上に反り返って

おり、下も平行に反り返っている。これが古い様式だそうである。説明を聴いている間も陽は容赦なく照りつけ喉が乾いてたまらない。今度どこかで自動販売機を見つけたら買いに走ろうと密かに考えていると、お寺の方が大きなやかんと湯飲みをたくさん運んできて下さった。なんと我々のためにお茶を冷やして用意して下さいたのである。しかも御煎茶と焙じ茶と両方ある。そのおいしいこと！！。形振りかまわず三杯も頂く。何よりの御馳走であった。丁寧にお礼を述べてバスに向かう。乗り込んでさあ出発というときに外にお寺の方がお見送りに来て下さっているのが見えた。一同感激して手を振る。「古き良き時代」という表現があるが、我々はまだその時代に生きているのではないか。そう感じた瞬間であった。木津川にかかる泉大橋をわたった対岸に平重衡の墓がある。治承四年（一一八〇）十二月、反平氏勢力の拠点であった南都攻撃の総大将として東大寺を焼き討ちした。後日、一ノ谷合戦で捕らえられ、東大寺側に引き渡され、文治元年（一一八五）六月二十三日、木津川で首を刎ねられた。道の反対側には和泉式部の墓とされる場所がある。何でも和泉式部の墓と言われる場所は全部で二十余りもあるとのこと。墓に寄せて和泉式部信仰なるものを検証すれば論文が書けるのではないかなどと言いながら通りすぎる。

やや南下したところに小さな休憩所があり、そこで

弁当ということになった。入り口があまりにせまいので

大型バスは入れないと思ったが、そこは素人の浅はかさ、見事にバックで入ってしまった。拍手が沸き起こる。前回の旅の大きな後悔はお弁当が期待はずれだったことである。そこで今回はお弁当には特に力を入れた。京都錦小路の伊豫又という古い押し寿司のお店に直接注文したものである。数年前何気なしに買ったお寿司がとてもおいしかったのでそれ以来京都に来るたびに帰りに買って帰ることにしている。あるときNHKの番組をみていたらそもそも伊豫又の初代が錦小路に魚屋を開いたのが今の錦市場の始まりであることがわかった。そこで特にたのんでお店の由緒書きも入れて頂いた。願わくば押し寿司の苦手な人がいないことを祈る。

一息ついて出発。市坂を通りたかったのであるが、大型バスが通行できない箇所があるので佐保台の方へ向かう。「山城州大絵図」にはこのあたり奈良へ向かう道は三本ある。東から高田を通る道、次が一ノ坂を通る奈良道、最後が祝園から山田川を渡る歌姫越えと呼ばれる郡山道である。我々が通過した道の左脇には歌姫瓦窯跡があるのでこれが歌姫越えと呼ばれる道と思われる。途中から福岡先生とヤサカ観光のドライバーの方が相談し、左京六丁目のところで東に折れ、佐保台二丁目を通って軌道修正し、奈良坂町へ入った。元正・元明両女帝の御陵を右手に奈良坂へ向かう。ここから奈良市街に入るのが長

谷寺参りの一般的な道であったと考えられる。下り坂の正面に東大寺の大きな屋根が見える。やがて市街に入り、左に東大寺の旧境内、右に興福寺の旧境内を見ながら通過。今回は有名な観光地はすべて通過する。

#### 奈良から与喜浦を経て長谷寺へ（二三：〇〇）

奈良からは国道一六九号線を一気に南下する。天理市に入り、石上町・石上神社を通過。左に東海自然歩道をみながらバスはひたすら走る。快調である。やや眠くなる。柳本町に入ると左手にこんもりとした林の御陵が見えた。崇神天皇陵、続いて景行天皇陵である。こちら辺りはヤサカ観光のガイド西之原さんの名案内があった。桜井市に入る。すぐに倭迹々日百襲姫命墓、箸墓古墳にさしかかる。九月十一日付の読売新聞に箸墓古墳周辺を発掘調査していた桜井市教育委員会が墳丘と周濠の外側を結ぶ渡り堤を確認したとあった。初瀬川に突き当たったところで川に沿って金屋に向かいたいところであるが、あいにく道がせまく大型バスが通行不可能なのでしかたなく川合まで一六九号線を南下する。金屋は海柘榴市跡で、長谷参りの宿泊地点であった。東海自然歩道が古道と思われる。川合からはほぼ直角に東に折れ、しばらく栗原川に沿ってすすみ、外山を過ぎたあたりで初瀬川を渡

る。川の南岸を通る国道一六五号線に乗る。黒崎のあたりが雄略天皇泊瀬朝倉宮跡である。バスは長谷寺を通過し与喜浦まで行く。

実はここから本居宣長が明和九年（一七七二）に『菅笠日記』に記した道を辿って長谷寺に入ろうという計画なのである。これは福嶋先生の御発案で資料も用意して下さり、日記の文に従って徒歩で長谷寺へ向かう。幸い此の辺り住宅地図を用意してあったので今回辿った道を性格に記録に残すことができた。『菅笠日記』には

けはひ坂とて、さがしき坂をすこしくだる。此坂路より。はつせの寺も里も。日のまへにちかく。あざあざと見たたされたるけしき。えもいはず

とある「けはひ坂」へ向かう。本当に山の小道といったところで住宅地図にも道は記入されていない。住宅地図はあくまでも「住宅」の地図であることを改めて認識する。坂の入り口で福嶋先生の説明を拝聴。龍谷先生は人が来ないうちにけはひ坂の写真を撮ろうと先行された。けはひ坂は『大和志』に

城上郡泊瀬斎宮古蹟在泊瀬氣比坂下

とあり、伊勢斎宮となった大来皇女が宿った場所で、後

から与喜天神の今一つの参道の下まで行く。天神様に向かって左に素盞雄神社へ行く道があり、その入り口の所が竹藪になっている。小さな石碑が二三ある。ここはその昔、庵があり玉鬘塔があった場所なのだそうである。玉鬘の塔とは『大和名所図会』によれば

長尾氏曰長谷寺の川東に玉かつらの石碑とて尼の庵の庭に五輪有いふかしき事なれとも宇治十帖に記したればこゝに出す云云（9）

と書かれている。本居宣長は『菅笠日記』に

玉鬘の君の跡とて。庵あり。墓もありといへど。けふはあるじの尼。物へまかりて。なきほどなれば。門さしたり。すべて此はつせに。そのあとかの跡とて。あまたある。みなまことしからぬ中にも。この玉かつらこそ。いともいともをかしけれ。かの源氏物語は。なべてそらごとども。わきまへで。まことに有けん人と思ひて。かかる所をもかまへ出たるにや

と書いている。ここを福嶋先生が関西弁で洒脱に解説して下さったのであるがそれを文章で表現できないのが残念である。この玉鬘塔は長谷寺参りの道とは直接関係がない。私が個人的に興味を抱いた塔であった。勿論『源

の野々宮の始まりであるとされる。『五畿内名所図会』にも「泊瀬斎宮」として「初瀬氣波比坂の下にあり」と書かれている。昔の伊勢街道である。今でも入口に石碑が立っており、かすかに「右くわん堂道」と読める。ぞろぞろと登り始める。隣を歩く友人は「あざあざ」という表現にこだわっている。「あざやかに」とか「すつきりと」という意味であるが坂の上にのぼりつめて少し下ったところ、木々の間からはるかに長谷寺が「あざやかに」見渡せる。これがなかなかよい。長谷寺に来たのは三度目であるが、此の景色は初めてである。

大かたここ迄の道は。山ぶところにて。ことなる見るめもなかりしに。さしもいかめしき僧坊御堂のたちつらなりたるを。にはかに見つけたるは。あらぬ世界に來たらんこちす。

張り合うつもりはないが宣長の方が感動をまざまざと伝えている。続いて

よきの天神と申す御社がまへに。くだりつきて。そこに板はしわたる流ぞ。はつせ川なりける。

とある。そのとおりである。しかし我々は「はつせ川」へは出ず、与喜天神の前を通って連歌橋まで行き、そこ

氏物語」が架空の物語であることは先刻承知である。昔の人もそんなことは承知していたであろう。それでも架空の物語にことよせて跡をつくり、実際に訪れて物語りをあたかも本当の出来事であったかのように享受するということはいかに人々が『源氏物語』に入れ込んでいたかという明かしであろう。此の手のことは現在でも行われている。この塔は源氏物語のもつ計り知れない魅力の具現化であると思うのである。それを見たいと思ったのである。玉鬘の塔があつた庵跡と先に書いたが、そう、この竹藪にはすでにその塔はない。塔は訳があつて現在は別の場所に移されている。我々は続いて宣長が

このややおくまりたるところに。家隆の二位の塔とて。石の十三重なるあり。こはややふるく見ゆ。そこに大きな杉の二またなるもたてり。

という素盞雄神社へ参拝した。宣長の記述はとても正確であるが、この部分の「杉の二またなるもたてり」だけが違っている。今ある二股の木は「銀杏」である。大木なので植え替えたとも思われない。杉の木の痕跡もない。興喜天満宮の前まで戻る。天満宮は山の高いところにあるのですでに疲れ切っている我々は下からお参りするだけに留めた。

長谷寺・玉鬘塔（一四：〇〇）

連歌橋を渡るといよいよ最終目的地長谷寺である。仁王門をくぐり少し回廊を上ったところに道明上人の塔が立っている。道明上人とは長谷寺の開祖として伝わる伝説的な人物であるが、実在が確認される史料として長谷寺が所蔵する「千仏多宝塔銅板」がある。この銘文に道明が天武天皇のために豊山（初瀬）の地に宝塔を敬造したと書かれている。このほか『日本三代実録』貞観十八年（八七六）五月二十八日条にも記事がある。八世紀頃の人である（一〇）。回廊の途中

ややのぼりて。ひぢをるる所に。貫之の軒端の梅といふもあり。

と宣長が書いた梅を見る。何代目かは知らないが細い木である。例の有名な歌

人はいさ心もしらず故郷は花ぞむかしの香に匂ひける  
という札もかかっているがこれは眉唾である。長谷詣での「中宿り」がこんな境内にあるはずがないからである。回廊を登り詰めた所の右脇に馬頭夫人社がある。『長谷寺

此ごろやうの物にて。いとしもうけられず

と述べた場所へ行く。「ちひさき杉」は年を経て巨大な杉になっている。玉鬘がこの杉の下で亡母の侍女右近と巡りあったという杉でもある。「定家の中納言の塔」は現在の長谷寺の葉では「定家塚」となっており、その脇のものが「俊成碑」となっている。しかし真ん中の塔の両側には二つ石碑がある。そもそも「定家塚」と「俊成碑」とは一体定家の何の「塚」で俊成の何の「碑」なのであるか。『大和名所図会』もこの疑問を解いてはくれない。そのまま下におり、宗宝院の脇の道を仁王門前の広場まで戻る。広場に着く直前の植え込みに木の札が立てられ、「玉鬘庵跡」と書かれている。ここは長谷寺が主張する玉鬘庵の跡である。実際に塔があった庵は先ほどの竹藪のところだそうでここに「長谷寺靈驗記」に多数の話が載っている訳がわかるように思う。参道に出て、しばらく行つてからとある個人のお宅の門をたたく。ここに例の玉鬘の塔があるのだという。福嶋先生が前もって三十名で押し掛ける旨を伝えて下さっていた。中庭に玉鬘の塔が大事に保存されている。塔がここに移されたのは竹藪に在ったとき塔の一番上の玉を誰かが取ってしまったた為とのこと。現在の玉は此の家のご主人の祖父に当たたる人が作って乗せたものだそうである。初瀬川は昔から洪水禍が度々あり、特に文化八年（一八一）六月

靈驗記』上・第六に書かれる唐の馬面の后が長谷寺の観音様の御利益により美人になったという話の主である。今まで長谷寺に来ても全く気づかなかったが気づいた以上は真剣にお参りする。登りきった所に尾上の鐘。「山城国木津の里 栗田助貞寄進（人呼んで未来男と云う）」と書かれている。国宝である。いよいよ本堂へ向かう。本尊十一面観世音菩薩像（重要文化財）は楠の霊木でつくられた日本最大の木造仏といわれる。大きいことはよく知っているつもりでも側によるとその足の大きさにいつも驚かされる。現世利益の仏様なのでしつかりとお祈りする。外舞台から先ほど辿った与喜浦からの道を探し、それをバックに記念撮影。本堂を抜けてしばらく行つたところに本長谷寺がある。小さなお堂である。その先に五重塔、そして三重塔跡がある。三重塔の説明に

慶長年間豊臣秀頼公によつて再建せられたるも明治九年三月祝融の災にかゝり現在は礎石のみを残す

とかかれています。「祝融って何？」という囁きが飛び交うが、「火事のことだよ」と天の声。坂を下り、回廊を横切つて進むと宣長が

二本の杉の跡とて。ちひさき杉あり。又すこしくだりて。定家の中納言の塔也といふ。五輪なる石たてり。

十五日夜の「初瀬流れ」は有名だそうである。塔の横の植え込みにある石の擬宝珠はそのときに流されてきたものだそうである。三十人の来客にも快く応対してくださり、お話してくださる様子が今回の旅行の成功感は先生方の丁寧な説明に加え、行く先々の方々の暖かいもてなしにあったのだと実感した。

結び

以上が、今回の全行程である。少し時間に余裕があったので道端で見つけたお茶屋風の喫茶店に入った。夕方の閉店間際に三十名もの団体が入ってお店はてんでこ舞いである。一息入れてから帰途に着く。荷物があるので近鉄長谷寺駅から帰る人もできるだけ近くまでバスで移動してくださるとのこと。皆で乗り込む。

長谷寺駅から大和八木方面に向かい、京都経由で東京まで帰る人、反対方面の名古屋に出てから東京まで帰る人、バスで京都まで戻る人、奈良に泊まる人とさまざまである。幹事は無責任にも奈良に泊まる予定を組んであるのでここでバスを降りる。ほとんどバスを停める場所がないにも係わらず、道端に強引に停まって駅へ向かう面々を降ろしてもらった。後ろに車が数珠繋ぎ連なっているのが見え、早々にバスは出発した。手を振って見送

る。地図上では駅は道のすぐ脇にあるように見えた。

しかし、我々は最後の最後に長谷がなぜ「長い谷」と書くのかを体感することになった。道は谷底を通り、脇の駅は谷の上である。重い荷物を抱えて黙々と上る間に考えた。なぜ「長谷」と書いて「はせ」と読むのであるうか。あれこれと考えているうちに駅に着いた。

後日、後藤先生から足利健亮先生の論文を頂いた。それによると「飛鳥」と書いて何故「あすか」と読むかについて足利氏は「あすか」の原義は不明であるが、最初に「安宿」という字が当てはめられ、「安らかな宿り」というところから飛ぶ鳥も好んで羽を休めるであろうということになり「飛鳥」が「安宿」の枕詞となった。そこから「飛鳥」という字と「安宿」という読みが合体して「飛鳥（あすか）」と読むようになったのではないかと推論された(11)。同様に「長谷」については次のように述べられている。

「長谷の初瀬（または泊瀬）」という表現から「飛鳥」のケースと同じように「ながたに」の音が略され「初瀬（泊瀬）」の文字が略されて、「長谷」の文字に「はせ」つまり「はせ」が付けられた短縮地名として生まれたことは間違いないであろう。が「長谷の初瀬（泊瀬）」という表現の、実際の用例を、筆者は探しあぐねている。これは是非博雅の教示を乞いたい。初瀬（泊

瀬）の枕詞は「隠国（隠口）」の「であって、「長谷の」という表現は、あるいは枕詞ではなかったのかもしれない。ただし、図に示した通り「初瀬」は、東西に長く延びる文字通りの「長谷」の中央部にある。「長谷の初瀬」という表現が成立したとして、それはこの場合は、あくまでもこの地形条件に基づくものであった。それは、「安宿」ならば「飛鳥」も羽を休めたであろうとの発想からする「飛鳥の安宿」表現の成立とは、いささか事情を異にする。ではあるが、短縮の手法は前述の通り、飛鳥の場合と異なることがない。

最後になってしまったが、お忙しい中、快く案内してくださった福岡昭治先生、オブザーバーであったはずなのにいつの間にか解説者になってしまった瀧谷寿先生、そして今回の旅を御発案してくださった後藤祥子先生に心から御礼を申し上げ、謝意を表したい。

注

- (1) 『蜻蛉日記』上・上村悦子校注・昭和四十三年刊・明治書院
- (2) (1)に同じ
- (3) 『貞信公記』延長二年二月十日条
- (4) 『大非山一音院法性寺』（法性寺パンフレット）
- (5) 『校訂三卷本枕草子』岸上慎二編・昭和五十九版

- (6) 『本朝文粹』卷十三（為左大臣供養浄妙寺願文・寛弘二年十月十九日）

- (7) 『碧山日録』（『改定史籍集覧』二五 所収）

- (8) 『木幡浄妙寺鐘銘井序』

木幡山者左青龍右白虎前朱雀後玄武之勝地也。四方似城百里不絶。元慶太政大臣昭宣公相地之宜、永為一門埋骨之処

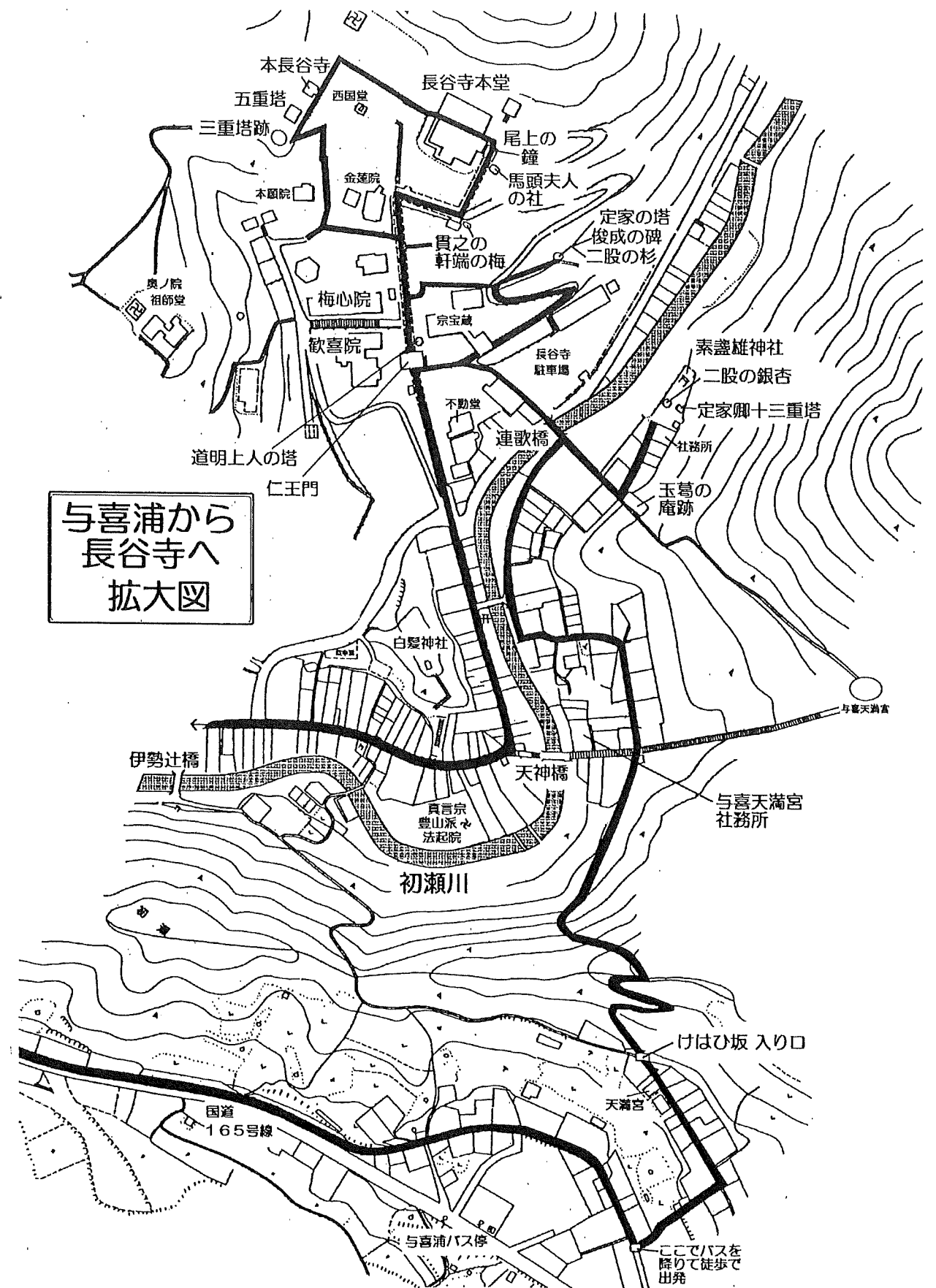
- (9) 「五倫」の「倫」は版本のまま。

- (10) 『朝日日本歴史人物事典』一九九四年・朝日新聞社

- (11) 足利健亮氏「地名と日本文化」

（『近江の歴史と文化』平成七年十一月）





与喜浦から  
長谷寺へ  
拡大図



